

1998.6

岡村昭彦の会 NO.8

人類はどこから来てどこへ行くのか

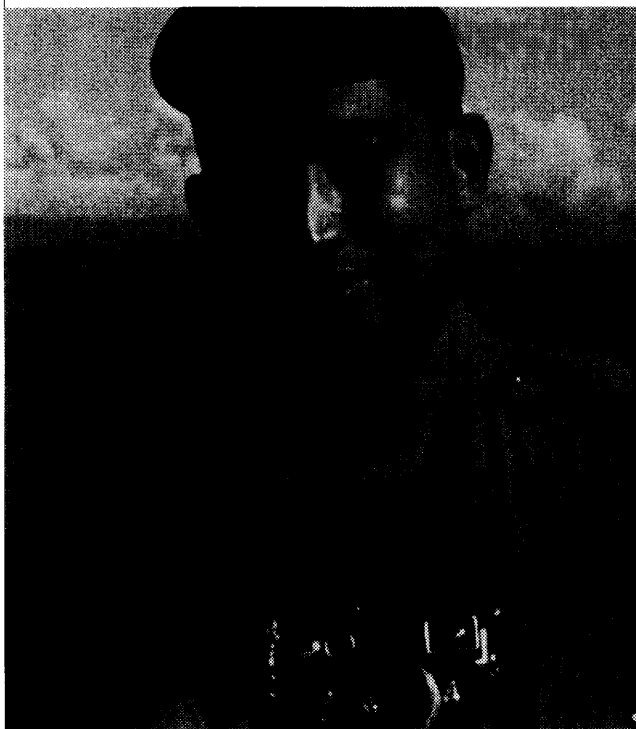
晩年の岡村昭彦は21世紀を見据えてテーマはずいぶん大きくなっていた

第13回AKIHIKOの会開催

没後13年、今年は「AKIHIKO忌」を開かれた会へという観点から「第13回AKIHIKOの会」として、三月二二日(日)、東京・神楽坂の日本出版クラブ会館で開催しました。

今年のテーマは、岡村が生きていたら、今何に関心を抱いているのだろうか、どんなメッセージを届けようとしているのだろうか、と考え、「人類はなぜ宇宙へ向かっているのか」そんな主題に目を向けてみることにしました。

講師はお二人。一人は数理科学者で作家の本田



成親(しげちか)氏。もう一人は国産HIIロケット打ち上げの成功を導いた宇宙科学者で、前筑波宇宙センター所長菊山紀彦(としひこ)氏。今年の出席者は五一名。遠くは北海道函館から昭彦氏の長女の佐藤純子さん、博多の大住敏子さんは車を飛ばして駆けつけました。

当初の「開かれた会」にしようとの目論見通り、今回は子ども連れの家族の参加が目立ちました。岡村家関係の参加が例年になく少なかったのは、親族が高齢になられてきたせいもあると思います。そして今年、かつての諏訪ゼミの雨宮多喜子さんはじめ、牛山洋子さん、奥原ます子さんなど看護婦さんたちの参加が多くありました。

第二部懇親会ではAKIHIKOを肴に、楽しい会になりました。特に昭彦の東京中学時代の同級生・元木敏規氏が、「酒は飲まない」と言いながらウイスキーボトルを飲み干した話など、取って置きのエピソードを交えて楽しく語ってくれました。

第三部も恒例となりましたが、場所を変えての二次会。来年三月をめどに『シャッター以前』第3号の発刊を、若手のメンバーを中心に編集しようという話も出て、こちらのほうも大いに盛り上がりました。

お二人の講演は、雰囲気だけですが―。

宇宙論の最前線

本田成親

(ほんだ・しげちか・数理科学者・紀行作家)



宇宙論というのはなぜ難しいか、というようなお話をしようと思っていましたら、このようなタイトルになっていて、戸惑っております。一口に宇宙論と言っても、宇宙工学は総合科学ですから非常に広いわけで、五十分かそこらではどういってお話しできないわけですが、とりあえず今日は、宇宙工学の菊山先生もお出でになっておりますので、私のほうは物理学的な宇宙論の世界が、現在どのような流れになっているかということをお話します。

宇宙論、宇宙論と言いますが、物理学的・数学的な概念を持った宇宙論と宇宙科学とはかなり違っていて、これを一口に宇宙という言葉で括るのはやっかいなことです。私はもともと数学が専門で、宇宙科学を専門にしてきた人間ではありません。宇宙の空間的なことをイメージしたり、解説したりしてきました。たとえて言うならば、ものごとにはキリストの役目とパウロの役目があると思うのですね。宇宙科学の最先端の方は、最先端の創造的なキリストの仕事をして、私はそういう方々のやった仕事を数学的な観点で、分かり易く解体してお伝えする仕事をさせていただいております。

宇宙論といいますと、まずぶつかるのがアインシュタインの「相対性理論」ですが、そのキーになるところを一つだけお話しして

おきますと、「時間が縮む、空間が縮む」と言われると、もうそれだけでわけが分からなくなるのですが、この世界を測るには何か物差しを決めておかないと、概念として語りようがないんです。

この物差しに、アインシュタインは、ニュートン力学の「物差し」ではなく、光の速度こそ信頼できる「物差し」といって、「光速不変の原理」を提唱するのですね。分かり易く言うと、動いている車から、前方にボールを投げると、外から見たとき、動きにボールの速さを加えたものがボールの速度になるわけですし、後ろに投げればボールの速さを引いたものがボールの速度になるわけですね。この常識が光の速度については成り立たないと言ったのです。よく数学で言っていることを、日常言語で説明してくださいといわれるのですが、これが一番難しい問題です。

日常言語でどうにも説明がつかないので、新しい言語でやっているというのが正直なところなんです(笑)。数式にしる、みなさんいやらしいなと思いいなるでしょうが、実は言葉なのです、抽象言語なのです。

(以下略)

〔注、菊山紀彦・本田成親著『宇宙の不思議がわかる本』(三笠書房刊)に、詳しく説明されています〕